

学生から見た少人数・習熟度別クラス編成 アンケートとインタビューに基づいて

志村美加・中竹真依子・小杉弥生

1. はじめに

学習院大学外国語教育研究センターでは、コロナ禍のため多くのクラスがオンライン形式で開講される中、段階を経て、基礎教養科目としての英語プログラムの改編を実施することとなった。第1段階として、2021年度は少人数・習熟度別クラス編成を3学部で開始した。本研究は、2021年度末に学生が少人数・習熟度別クラス編成をどのように捉えているのかをWebアンケートとインタビューを通して分析し、どのような改編がより適切な英語プログラムの運営へと繋がるのかを検討する。インタビューはアンケート終了後に実施し、学生がなぜそのようにアンケートに回答したのかという理由を明らかにしたい。これまでの先行研究では、少人数クラスと習熟度別クラス編成に関する学生の声を取りあげているものが少ないが、インタビューを通して学生の少人数クラスと習熟度別クラス編成の捉え方を確認することで、より適切な英語プログラムに改編することが可能になると考える。

2. 先行研究

2.1 少人数クラス

大学における英語クラスの履修者数は、かつて1クラスあたり50～60名ということも頻繁に見受けられたが、この20年余りでクラスサイズを小さくしている大学が多くなっている。これには、少子化により18歳人口が減少する中で大学教育の大衆化が進み、それまで見られなかった学生の入学時における英語習熟度の多様化が進んだこと（鳥飼・進藤, 1996）、そして、2000年前後から

推進された入試制度の多様化により、学生の大学入学時の英語習熟度の差が拡大したことが影響しており（西出，2019）、少人数化と習熟度別クラス編成の双方を導入する大学が増加した。

“少人数教育”という場合には具体的にどれくらいの人数を指すのかということとは、大学によって異なっており、英語教育で知られる国際基督教大学は1クラス約20名（国際基督教大学，2022）、同じく立教大学も約20名（立教大学，2022）となっている。また、法政大学では20～25名（法政大学，2022）、近年英語プログラムを改編した宇都宮大学（三村，2021）では授業によっても異なるが約30名となっており、一般的に20～30名となっていることが多い。

前述の通り、近年、少人数化と習熟度別クラス編成の双方を導入する大学が増えていることから、習熟度別クラス編成の効果を検証する際に、前提として少人数クラス編成が行われることが多くなっている。そのため、大学の英語クラスの少人数化による教育効果のみを検証する研究は少ない。そのような中で、伊澤・増富（2010）では、約30名の1年生の英語基礎学力養成を図ることを目的とした試みとして、1学期は約30名だった履修者数を2学期には約60名とし、その変化の影響を学生へのアンケート調査で確認した。学生は、スピーキング・リスニング中心のクラス（以下、SLクラス）と、リーディング・ライティング中心のクラス（以下、RWクラス）の2クラスを履修した。SLクラスに関しては、1学期には全員が「ちょうどよい」クラスサイズだと回答していたが、2学期に60名クラスになっても8割以上の学生が「ちょうどよい」と回答し、15%弱の学生が「やや多い」、「多い」と回答したのみだった。RWクラスに関しては、1学期には「ちょうど良い」と回答した学生が大半を占め、「やや多い」「多すぎる」と回答した学生が約25%だったが、2学期には90%以上の学生が「ちょうどよい」と回答した。

この結果に関しては、学生が必ずしも“授業で得られた成果”という観点から回答しておらず、“授業でどのような印象をもったか”という結果を示している可能性があることが指摘されている。クラスサイズについて「ちょうどよい」と回答した学生が、その理由として「授業中に指名される回数が多くなり、ちょうど良い人数だと思った」、「高校の時のクラスと同じぐらいで良かった」など

学生から見た少人数・習熟度別クラス編成 アンケートとインタビューに基づいて (志村美加・中竹真依子・小杉弥生)

と回答していることから、必ずしも“成果”を考慮せずに回答していることがわかる。

その一方で、授業の理解度に関しては、1学期には「理解できた」と回答した学生が約220人であったのに対し、1クラス約60名となった2学期には70名弱まで減ったことが示されている。したがって、少人数制の効果は、学生の理解度に影響があることが確認できたと結論付けられている。

2.2 習熟度別クラス

先述のように、入学時の学生の英語習熟度の拡大により、多くの大学が習熟度別クラス編成を実施しなくてはならない状況にあり (上田・勅使河原・林, 2014)、その動きが全国的な傾向となっている (小笠原, 2012) ことが指摘されてから久しい。

また、少人数クラスは、中学校や高校でも実施する学校が増えており、東京都教育委員会の『東京方式少人数・習熟度別指導ガイドライン (改訂版)《中学校 英語》』(2020)でも、25人以下の少人数による指導を推進することが示されており、少人数とする意義に関しては次のように説明がされている。

教員一人が1単位時間の授業において、生徒一人一人と直接、英語で会話したり、生徒一人一人の発話の状況を把握し、全ての生徒に必ず1回の個別指導を行ったりするためには、25人以下の編成が望ましい。(東京都教育委員会, 2020, p.2)

また、少人数、習熟度別クラス編成を導入する高校も増加傾向にあり、3795校の普通科 (国際関係や語学の学科・コースを除く) を対象とした2021年度の調査では、少人数・習熟度別クラス編成がされているオールラウンドコミュニケーションIのクラスは50.2%、英語Iのクラスは41.3%となっている (文部科学省, 2021)。このことから、高校で少人数・習熟度別クラス編成がされた英語の授業を履修してから大学に入学する学生の数が増加していることがわかる。

その一方で、習熟度別クラス編成を導入することについては、メリットとデ

メリットがあることが指摘されている（高橋, 2000）。主なメリットとしては、1) 学習者の学力に応じた授業ができ、学力向上に効果がある、2) 上位クラスの学習者はお互いに磨き合い、学習意欲を高める、3) 下位クラスの学習者は優れた学習者による圧迫感がなく、楽しんで学習できる、4) 教員は教えやすいなどの点あげられている。また、デメリットとしては、1) 学習者に差別・選別意識が生まれる、2) 下位クラスの学習者が劣等感を抱く、3) 上位クラスの学習者が優越感を抱く、4) 下位クラスを担当する教員の負担は過重となる場合が多いなどの点あげられている。

また、大学における英語の習熟度別クラスの効果についての研究は、その規模や対象となる学生の英語習熟度、所属学部、対象となるクラス、調査方法等が様々なものとなっている。調査対象の学生数が小さいものも多く、学生数が大きい調査は多くはない。

調査対象の学生数が少ないものには、英語プログラム改編前に試験的に行われたクラス編成の調査報告も含まれる。水野・山岸・木村他（2022）は、習熟度別クラス編成を全学的に導入する前段階として、3年にわたり、習熟度別クラスを履修する学生の授業に対する満足度を調査した。基礎力拡充クラス（3クラス）と語学留学準備のための上級クラス（2クラス）の計5クラスが開講され、それぞれ約10名の学生が履修した。学生へのアンケートやインタビュー、担当教員の感想などから、基礎力拡充クラスと上級クラスの双方で授業に対する満足度が高いことが明らかになった。

また、田原・堀江・竹内（2001）では短期大学の英文科の学生を対象に、英作文と英会話のクラスを履修する1・2年生に対してアンケート調査を行った。1学期に1年生80名は混合クラスを履修し、2年生86名は3レベルに分かれた習熟度別クラスを履修した。1学期の終了時に実施されたアンケートデータを分析した結果、混合クラスを履修した1年生よりも、習熟度別クラスを履修した2年生の方が授業の難易度が適切であると感じており、授業に対する満足度も高いことが分かった。

同様に、Hasegawa, Kuwana, & Hojo（2019）では、約200人の発達教育学部と保健医療学部の1年生を対象に3年にわたる継続調査を行った。学生は、習

熟度別 (3 レベル)、かつ 1 クラス約 20 名の少人数クラスで、1 学期に計 15 回にわたり、ライティング力とスピーキング力の向上に重点をおいた 4 スキルの授業を履修した。リスニング力が向上することによって、スピーキング力、リーディング力、ライティング力も向上するというという仮説 (竹蓋, 1997) を検証した結果、リスニング力の伸びは見られなかったものの、下位クラスにおいては、リーディング力を中心とする筆記試験では 3 年間を通して有意な伸びがみられたことが報告されている。

また、小笠原 (2011) では、工学部 2 年生の約 180 名の学生を上位・中位・下位の 3 レベルの英語習熟度クラスに分け、1 クラス約 30 名で 2 学期の総合英語クラスを受講させた。学生は、英語の非母語話者の実用的な英語運用能力を測定・評価するために用いられる G-TELP を履修前と履修後に受け、そのスコアを分析することで習熟度クラス編成の効果を測った。その結果、下位クラスに関しては、大きな効果が見られたが、上位クラスにおいては大きな効果は見られなかった。

また、Rodriguez-Yagi and Rupp (2020) は、農学部の約 100 名の学生が、4 レベルの習熟度別編成となっているリーディング・ライティングクラスと、混合クラスとなっているリスニング・スピーキングクラスの双方を履修した後に、アンケート調査を実施した。その結果、学生は習熟度別クラス編成と混合クラス編成のどちらにも満足しており、どちらかを好むという傾向は見られなかった。ただし、リーディング・ライティングクラスに関しては、最もレベルが低いクラスの学生の方が、最もレベルの高いクラスの学生よりも習熟度別クラス編成に満足していることが明らかになった。

調査対象の学生数が大きな研究は多くはないが、次のような 1000 人規模の調査結果も報告されている。

剣持・大年・阿部他 (2013) は、1 学期に「総合英語」を履修した 11 学部の約 1000 名の 1 年生にアンケートを実施し、授業への満足度を調査した。学生は、TOEIC® IP スコア 395 点以下、400 点以上 595 点以下、600 点以上の 3 レベルの習熟度別クラスに分かれて履修し、1 学期末にアンケートに回答した。アンケートは、授業の理解度、教材のレベル、教員の教え方などの項目から構成され、

分析の結果、習熟度の低いクラスの学生よりも、習熟度の高いクラスの学生の方が授業に対する満足度が高いことが明らかになった。

また、平野（2022）は、外国語学部を中心とした1～4年生約1000名の学生が3レベルの習熟度別クラスを履修した後にアンケート調査を行った。上級クラスはIELTS™ 5.5以上、またはTOEFL® iBT 54以上、中級クラスはIELTS™ 4.5～5.0、またはTOEFL® iBT 39～54と設定され、上級クラスは38名、中級クラスは145名、下級クラスは836名が履修した。その結果、上位群の学生は、レベルの高いクラスで学ぶ意欲とコンテンツ科目を受講する意欲が高いのに対し、下位群の学生はスキル科目を受講する意欲が高く、スピーキングスキルを高める意欲は高いが、リーディングとライティングスキルを高める意欲は低いことが明らかになった。その結果、下位群の学生に対しては、将来、英語が必要となる場を想定させるといったアプローチ等の必要性が指摘されている。

本研究は、英語リーディングクラスを履修する1・2年生の少人数・習熟度別クラス編成に対する意識を調査することを目的とし、2学年分の学生のデータを分析することで学生の実態により適合した英語プログラム改編へとつなげることを目標とする。また、多くの先行研究では、アンケートのみを用いて調査を行っており、学生がなぜそのように回答をしたのかをインタビューを通して確認している研究は少ない。そのため、本研究ではアンケート調査に加えてインタビューを実施し、その双方のデータを用いて分析することで、学生の声も反映させたより適切な英語プログラムにすることを目的とする。

3. 方法

3.1 調査参加者

当センターでは、1年次と2年次に履修するクラスとして、リーディングクラスとコミュニケーションクラスを開講している。本研究の参加者となった学生は、2021年度に基礎教養科目の英語リーディングクラスを履修した法学部、経済学部、文学部、理学部の1年生1720人と2年生1332人である。なお、経

学生から見た少人数・習熟度別クラス編成 アンケートとインタビューに基づいて (志村美加・中竹真依子・小杉弥生)

経済部の1・2年生クラスと法学部法学科の2年生クラスは英語クラスの履修が必修となっておらず、少人数・習熟度別クラス編成の形もとっていないため、また、文学部の英語英米文化学科は独自の英語プログラムを実施しているため、対象から除く形をとった。その結果、対象となった学生は、1年生1283名、2年生1064名となった。

学生は学部・学科ごとにリーディングクラスを履修し、1クラスあたりの履修者数はその年度の入学者数によっても異なるが、履修者数が少ないクラスで20名程度、最も多いクラスでも30名未満となった。

1年生のリーディングクラスは88クラスが開講された。2021年度から英語プログラムの改編が開始されたため、1年生のクラスは法学部、文学部（英語英米文化学科を除く）、理学部の3学部の計60クラスで少人数・習熟度別クラス編成が行われた。

2年生のリーディングクラスは62クラスが開講され、法学部政治学科、文学部（英語英米文化学科を除く）、理学部の計46クラスが調査対象となった。また、2020年度までの英語プログラムが継続されたため、法学部政治学科と理学部では16クラスのみで少人数・習熟度別クラス編成が行われ、他の30クラスは混合クラスとなった。

なお、習熟度別クラス編成には、学生が年度の始め、または前年度の終わりに受けたTOEIC® Listening & Reading Testのスコアを利用した。

3.2 マテリアル

本研究で用いたアンケートとインタビューの詳細は、それぞれ次のとおりである。

3.2.1 アンケート

2021年度はまだコロナ禍にあり、当センターではリーディングクラスの多くがオンラインで開講された。そのため、マークシート形式のアンケートの実施を計画していたが、webアンケート形式へと変更した。回答期間は2週間とし、Webアンケートの作成はアンケートの専門業者に依頼した。

アンケートは選択肢形式と自由記述形式の計20項目から構成されるが、本研究では英語プログラム改編の第1段階として行った「少人数クラス編成」と「習熟度別クラス編成」に関する2項目を取り上げる。

それぞれの項目と選択肢は次のとおりである。

- 1) このクラスの学生数は適切ですか
 1. 多すぎる
 2. やや多い
 3. ちょうど良い
 4. やや少ない
 5. 少なすぎる
- 2) 習熟度別クラス編成は有用だと思いますか
 1. そう思う
 2. ややそう思う
 3. どちらとも言えない
 4. あまりそう思わない
 5. そう思わない

3.2.2 インタビュー

コロナ禍において大学のキャンパスでインタビューを実施することが困難であったため、インタビューはZoomを使って行った。インタビューの対象となる学生は、本研究に関わる3名の教員が、それぞれ担当するリーディングクラスの学生にインタビューへの協力を依頼する形をとった。

インタビューの対象となる学生を選択する際には、「少人数クラス編成」と「習熟度別クラス編成」の2項目への回答を確認し、それぞれの項目に異なる回答をしている学生を選択した。「少人数クラス編成」に関する項目では、「多すぎる」、「ちょうど良い」、「少なすぎる」と回答した学生を中心に選び、「習熟度別クラス編成」の項目に関しては、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そう思わない」と回答している学生を中心に選択した。

さらに、それぞれの回答に、成績上位者と中位者、下位者が含まれるように学生を選択し、それぞれの教員が約15名の学生に協力依頼の連絡をした。連絡はG-port、またはWebClassを使って行った。インタビューに協力を得られた学生は最終的に21名となった。

それぞれのインタビューは、学生1名に対して教員2～3名が対応する形式をとった。グループインタビューとしなかったのは、それぞれの学生が他の学生を気にすることなく発言できるようにするため、そして周りの学生の発言に

影響を受けないようにするためである。インタビューにおいては、教員1名がインタビュアーとしての中心的役割を担い、残りの教員はそれを補足する形で質問をする形式をとった。また、学生が発言しやすいように、インタビュアーはやわらかい表現を用いて雰囲気作りに努めた。学生一人当たりのインタビュー時間は約30分とした。

3.3 手順

アンケートは、1学期末と2学期末の2回にわたって実施した。学生にはアンケートの回答期間の初日にG-portで回答依頼のメッセージが送信されるように設定をし、2週間の回答期間をとった。一般的に、オンラインで授業が開講されている場合は、教室で教員が説明をしてから学生にその場でwebアンケートに回答させる場合よりも回答率が低くなるとあらかじめアンケート専門業者から指摘があったため、回答期間中に2回にわたって回答依頼のメッセージを送信した。しかし、1学期末・2学期末共に予想していたよりも低い回答率であることがwebアンケート終了時にわかったため、回答期間を12日間延長し、回答依頼のメッセージを学生に再度送信した。延長をしたことによって2～3%の回答率の上昇はあったが、回答率の大幅な増加は見られなかった。

1学期末と2学期末ではアンケートの回答率に大きな開きがあり、2学期末の回答率は50%よりも低くなった。このため、本研究の分析では1学期末のアンケート回答のみを分析対象とした。再履修者や回答方法に問題があった学生は除いた結果、有効回答者数は1年生が924人、2年生が661人となり、回答率は1年生が69.6%、2年生が59.8%となった。また、インタビューをする学生を選択する際には、1学期のアンケートに加え、2学期のアンケートへの回答と成績評価をもとに学生を選択した。

4. 結果

「少人数クラス編成」と「習熟度別クラス編成」に関する分析結果は、下記の通りとなった。アンケートの分析結果、そしてインタビューの分析結果という

順で示す。

4.1 アンケートの分析結果

アンケートにおける「少人数クラス編成」と「習熟度別クラス編成」の2項目を分析し、次のような結果となった。

4.1.1 少人数クラス編成

履修したクラスの履修人数が「適切である」と回答した学生は、1年生は法学部・文学部・理学部の全ての学部で約9割となり、平均は92.3%となった。2年生は全ての学部で「ちょうど良い」と回答した学生が9割を超えて92.4%となった(表1参照)。

表1 履修したクラスの履修人数に関する1・2年生の回答結果 (%)

	多すぎる	やや多い	ちょうど良い	やや少ない	少なすぎる
1年生	0.3	2.6	92.3	4.5	0.3
2年生	0.3	5.3	92.4	1.8	0.2

4.1.2 習熟度別クラス編成

習熟度別クラス編成に関しては、有効だと考える「そう思う」と「ややそう思う」と回答した学生が1年生はそれぞれ49.8%、28.4%、2年生は34.9%、32.2%となった(表2参照)。なお、「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の各選択肢を選択した人数は、1年生はそれぞれ、458人、261人、162人、27人、12人、2年生は230人、212人、167人、37人、13人だった。

表2 習熟度別クラス編成の有効性に関する1・2年生の回答結果 (%)

	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
1年生	49.8	28.4	17.6	2.9	1.3
2年生	34.9	32.2	25.3	5.6	2.0

1年生と2年生の回答に有意な差があるのかを確かめるためにカイ二乗検定を行った。検定の結果 ($\chi^2=40.27$, $df=4$, $p=0.00$)、1年生と2年生の回答は異なることが明らかになった。その原因として、習熟度別クラス編成の有無が影響していると推測される。1年生は3学部のすべての学科で習熟度別クラス編成が行われていたが、2年生は法学部政治学科と理学部では習熟度別クラス編成が行われていたが、文学部は混合クラスとなっていたためである。

この仮説を検証するために、習熟度別クラス編成が行われていた2年生の政治学科と理学部の学生の回答と、習熟度別クラス編成が行われていなかった文学部の学生の回答の間に有意な差があるのかを確かめることとし、カイ二乗検定を行った。検定の結果 ($\chi^2=14.54$, $df=7$, $p=0.069$)、習熟度別になっている政治学科と理学部のクラスの学生の回答と、文学部の学生の回答の間に10%水準ではあるが有意な差があることが認められた。

更に、どの回答に大きな差が現れたのかを分析するために、残差分析を行った (表3参照)。

表3 残差分析の結果 (p値)

そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう 思わない	そう思わない
0.0000	0.1040	0.0002	0.0078	0.2941

その結果、全体的に有意な差が見られたが、特に差が大きかったのは「そう思う」であった。これは、習熟度別クラス編成が行われていない文学部2年生の「そう思う」の回答数が著しく少ないことを示す。

4.2 インタビューの分析結果

インタビューにおける「少人数クラス編成」と「習熟度別クラス編成」の2項目における学生のコメントを分析した結果、次のようなコメントが多いことが明らかになった。

4.2.1 少人数クラス編成

インタビューにおいて学生に回答理由を確かめたところ、1年生、2年生共に、

高校での英語の授業の履修者数に基づいて判断をしている学生が多いことが明らかになった。コロナ禍であったため、1年生、2年生共に大半の学生は大学入学後に受講した対面授業の数が少ない中、本研究に関わる3人の教員は対面授業とオンライン授業を併用していたため、英語の授業が数少ない対面授業の1つであるという学生も多かった。そのため、リーディングクラスのクラスサイズに関しては、高校時代の英語の授業を基準として判断していることが多いと思われる。これは、伊澤・増富（2010）と同様に、学生は“授業で得られた成果”ではなく、“授業での印象”で判断していると考えられる。

その一方で、「ちょうど良い」と回答した学生は、“授業で得られた成果”として下記のように、授業中にグループワークがしやすい人数であることや、クラスメートとのコミュニケーションの機会が多いこと、コミュニケーションが取りやすいことなどを理由に挙げている。このことから、学生が“授業での印象”だけではなく“授業で得られた成果”という視点からも判断していると考えられる。なお、3人の教員はインタビューを受けた学生が履修しているクラスを担当しており、それぞれ授業でグループワークを取り入れていたことから、グループワークに関するコメントが中心となったと思われる。下記にインタビューにおける学生の実際のコメントを引用する。

- ・高校だと40人クラスの規模感だと思うんですけど、その半分でやれてよかったです。40人だと、なかなかみんなで一つのトピックを話し合うのも時間が限られてくると思うけれど、その半分ということもあって、密に話ができただけかなと思います。
- ・先生の授業のときは教科書に段落が五つあって、それをグループごとに調べるって感じだったと思うんですけど、そのグループワークをするのに1班につき3、4人、多くて5人ぐらい程度っていう人数は、私はちょうどいいと思っていたので、そのグループワークをするのに22人程度のクラス全体の人数もちょうどいいのかなって思いました。
- ・あまり多すぎても、会話をせず終わってしまった人とかがいると思うんですけど、人数が大体20人前後ぐらいで、回数差はあるんですけど、ほ

とんどの人と会話する機会はあったかなって感じています。

- ・グループワークのときに、大体1グループ3人か4人ぐらいで、例えば司会の人を設けて、全員にちゃんと意見を聞きやすかったというか、あまり多いと、発言しない人も出てくると思うので、多分3、4人ぐらいでちょうど良かったのではないかなと思っています。
- ・グループワークとかも、さらに30名から少人数になって、分からないところをお互いに聞いたりできて、また、発表のときに他のグループの人の意見とかもいろいろ聞けたので、人数としては、私としてはちょうどよかったなと思います。
- ・多すぎないほうが確実に先生とも話しやすいです。(中略)例えば30とか40人より、20人っていう顔とか名前とか覚えられるくらいのちょうどいい人数だと、生徒同士でいろんな人と話をしたり、話しかけやすくなって思っ。あまり教室が広すぎないし。コミュニケーションが取りやすい一番ちょうどいい人数ぐらいだなって思っだったので、学習に適していると思っました。
- ・特に多過ぎず少な過ぎずっていうので、1年生ってこともあって、全然、友達もいない中で、あの人数で一応お互いの名前も顔も一致できるし、毎回のグループ分けとかそういうアクティビティでお互いのことを知れるっていうので、ちょうどいい人数なのかなって思っました。

また、少数ではあるが、少人数であることで、グループワークの発表時間や作業時間が適切であったことを指摘するコメントも見受けられた。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・(「やや多い」と回答したのは、学生数が30人だったので)例えば、グループで何か発表するとか、グループごとに順番が決まっていっていうときに発表の時間が足りなくなったりとか、準備に時間がかかったりとか(しました)。
- ・高校時代とかの経験からの話にはなってしまうんですけど、中学、高校の

ときも少人数で組むってというのが、結構あったので、慣れていたって一部分もあったんですけど。ペアワークとか、グループワークをする上で、あまり（履修者数が）多過ぎても発表の数が大変だし、ちょうどいい人数かなって思いました。

また、少人数であることにより、教員とのコミュニケーションの取りやすさや、教員の目が学生一人ひとりに行き届いていることなど、教員とのより良い関係についてのコメントも見られた。（以下、インタビューでの学生のコメント）

- ・（履修者数が）多過ぎると先生とのコミュニケーションも取れなかったり、ちゃんと分かってないまま進んじゃったりすることもあると思いますけど、多過ぎず、少な過ぎず、少な過ぎても他の人とコミュニケーションが取れないこともあるので、ちょうどいいかなと思いました。
- ・今まで受けてきた英語が、高校とかの授業になるんですけど、大体、自分のクラスが40人ぐらいだったんですけど、40人を1人の先生でみるってなると、僕たち（一人一人）に割く時間は結構、少なくなっちゃうのかなと思って。今回（履修者数が）17人ってということで、いろいろと一人一人に目が行き届いていたというか、質問しやすかったりしていたので、これぐらいの人数がいいのかなって思います。
- ・まず、大人数だと先生との交流ってというのがどうしても少なくなるなっていうふうに感じたんですけど、少人数であることで、先生と、授業のことに関する話もそうなんですけど、それ以外にもコミュニケーションを取っていただいたりして授業が楽しく感じたので、少人数はちょうどいいなっていうふうに回答しました。
- ・普通に授業聞いて、先生が説明とかしてくださっているときは全然問題ないので、質問したいときとか、人数が多いと授業中に質問がしづらかってことが結構あります。
- ・語学学習だったら、やっぱり先生との距離感ってすごく大事だと思う。できたら少ない人数のほうが、コミュニケーションが取りやすいかなって思っ

たりはします。

また、多くの学生はリーディングクラスに加え、コミュニケーションクラスを履修していたため、履修しているコミュニケーションクラスと比較したコメントもあった。コミュニケーションクラスの多くもオンライン授業となっていたため、対面授業とオンライン授業を併用した3人の教員のリーディングクラスとは異なり、クラスの履修者数を感じられる機会が少なかったという指摘もあった。英語クラスをオンライン形式で実施することに関しては、その実施方法を含め、さらに掘り下げて詳しく検討する必要があるだろう。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・私、英語のクラスは3クラス取っていて、でも（このリーディングクラス以外の）その他のクラスは結構Zoomでのやりとりも多かったので、この（リーディングの）クラスほど人数の規模について考えることがあまりなかったのですが、このクラスに関しては、ちょうどいいと思っていました。
- ・（コミュニケーションクラスは）Zoomでもブレイクアウトルームとかでグループワークはするのですが、その場合は3、4人ぐらいのグループに分けられるのですが、3、4人のグループがクラス全体でいくつできているのかは分からないこともあって、他のクラスでは、そのクラスの規模感みたいなのはあまり考えたことはなかったかもしれません。

4.2.2 習熟度別クラス編成

「習熟度別クラス編成が有用であると思うか」という問いに対して、「そう思う」と「ややそう思う」と回答した学生は、下記のように、クラスメートとの関係を気にしており、同じレベルのクラスメートと学習することで、お互いに分からない箇所が一致するために安心ができ、協力がしやすい、質問がしやすいなどの好意的なコメントがあげられることが多かった。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・例えば、英語の問題とか教科書の問題を話し合うときでも、同じレベルぐらいの人たちが意見を出すほうが分かりやすいのかなと思って。例えば、すごいできる人とあんまりできない人が混在しているクラスだと、どちらでも自分の回答に自信を持てなくなるのかなと思って。答え合わせとかをしているときに。
- ・みんな同じぐらいの学力で同じような問題を、“これ分かんないね”って言って話し合ったり、同じレベルでの対話（ができたり）、話ができたなって思って、「ややそう思う」を選びました。
- ・“ここ分からないんだよね”って言ったときに、“自分もここ分からないの”とか、“自分でもここは分かったよ”、みたいなところはレベルが大体同じほうが、答え合わせがしやすいというか、お互いに相談もしやすいし、また分からないところが明確化されやすいのかなっていうふうに思いましたね。

また、次のように、習熟度別クラス編成となることで、クラスメートに頼るのではなく、自ら学ぶ機会が確保されることを指摘する学生や、教員を気遣うコメントもあった。（以下、インタビューでの学生のコメント）

- ・今回の授業だと、5人で一つのグループでやるみたいな感じだったじゃないですか。習熟度が混ざっていると、恐らくですけど、高確率で1人はすぐくできる人がいるのですよ。そうすると、もうその人におんぶに抱っこになって、何もやらなくなるっていうのがあるなと思って、それだったら、ある程度同じくらいで、みんなで必死に悩んで結論を出すってほうが、勉強にはなるかなと思って、「そう思う」という回答にしました。
- ・同じレベルの学生だけだと、わかるところとわからないところが共通しているんで明確化され、先生も教えやすいのでは。
- ・同じレベルじゃない人と一緒にやってしまうと、やっぱり得意ではない人と得意な人の差ができてしまって、授業の内容もどっちに合わせたらいいいのかな分からなくなってしまうと思うので。やっぱりそういうのは習熟度別

というか、できる順にクラスを分けていったほうが、みんなの能力に合った授業ができるのでいいのではないかと思います。

- ・めっちゃくちゃできる人と、そんなに得意じゃないって人が一緒に同じ教室にいるっていうよりは、大体同じぐらいの英語力ある人のほうが、授業とかも進めやすいだろうなって。問題とかのレベルが自分の習熟度に合わせたものになるはずなので、そういう点ではいいかと、やりやすいかと。

また、英語の習熟度が低い学生を中心に、混合クラスとなっている場合にはクラスに溶け込めない感覚があることを述べるコメントが見られた。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・(今年は習熟度別クラスを履修して) 同じクラスの人の中で、特別にこの人だけできないとか、逆に、自分だけできてないなってすごく感ずかかって言われたら、そうじゃなくって。外国語の学習は、結構、今まで不安に感じていたことが多いっていうこともあって、取り残されている感がないほうが、自分的には学習しやすかったり。あと、発言とかもしやすかったなっていうふうに思います。(中略) もともと、中学生の頃から苦手だったのですけど、英語を話していることに憧れとかがあって、(高校では) 英語コースに入って。そうしたらやっぱり帰国子女の人とか、もともと英語ができる人とかがすごく多かったってのがあって、取り残されてる感があったのかなと思います。
- ・(高校の英語のクラスが習熟度別になっていなかったことは) (プラスにもマイナスにも) どちらにも働かなかったというか、関心がなかったもので、でも、すごい人はすごいなって思って、それ故に、どこか届かないレベルだなって感じて、あまり刺激を受けなかったというか、かえって無関心になってしまったかなってという点はあると思います。

その一方で、英語の習熟度が高い学生からは、混合クラスになっている場合に授業の進度や授業内容が気になるというコメントがみられた。(以下、インタ

ビューでの学生のコメント)

- ・ 中学校の頃も習熟度別で分かれていて、そうすると、自分に合った内容の勉強ができるっていうのが一番いいかなと思っていて、高校のときは英語は習熟度で分かれていなかったの、進めない、誰か1人とか数人のつまずきによって先に進めないっていうことが起こっていたので、習熟度別でもあるかもしれないですけど、全く分けないよりは、そういうことが減ると思うのでいいかなと思いました。
- ・ グループワークの場合は、もし、英語が不得意な人がいたら、その人に教えることに意識が向かってしまって、それぞれの解釈を話し合う時間っていうのが減っちゃう可能性があるかなと思ったので、話し合いとかをするのであれば、同じレベルの人が集まったほうが進みやすいのかなと思います。
- ・ あんまり得意じゃない人にこっちが説明しなければならなくなってしまおうと思うので。こちらとしても、私が上みたいになっちゃうんですけど、授業を、内容を理解したいし、説明ではなくて内容を重視したいので。習熟度があんまり達してない人とやるってなったら授業の趣旨に合わないような気がします。

一方、習熟度別クラスに対する否定的な回答もいくつか見られ、振り分けられた習熟度別クラスのレベルによって、かえって英語学習に対するモチベーションの低下につながるというコメントもあった。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・ モチベーションにつながらないというか、(英語が)できても、できなくても。できるのだったら、得意だからすごく頑張ろうとか、苦手だから苦手なりにできるところをやろうみたいなふうに、極端だとなってしまうんですけど。真ん中のクラスになったときは、中途半端で、私だったら頑張ることができなくなるなど思ったんですけど。極端に得意とか苦手なときは、習熟度別のクラスだったら、すごいやりやすいなって思いました。

また、英語力のレベルに応じてそれぞれ感じるメリット、デメリットがあることを指摘し、習熟度別クラスの有用性に関して「どちらでもない」と回答する学生もみられた。(以下、インタビューでの学生のコメント)

- ・習熟度別になると、上の人たち、学力が上の方は、より英語をっていう探求心というか、そういうものがすごい強くあるなって思ったので、授業で“やってください”って言わなくても学習を進めると思ったのですが、下の人だと、英語があまり好きでない人とかがいて、周りからの刺激で英語を学ぶみたいな環境がないのかなと思って、というのと、習熟度別ではなかった場合に、(周りに英語を上手に話せる)留学生の人がいて、すごく発音が上手だったりっていうのに刺激を受けて、私も発音がうまくなりたいとか、そういう刺激をもらっていたので、どちらにもメリットはあると思ったので、「どちらでもない」というふうに回答しました。

5. 考察

以上のアンケートの回答結果とインタビューから、少人数クラス編成と習熟度別クラス編成の実施に関して概ね適切であることが明らかになったが、当センターでの英語プログラム改編を進めていく中でどうするべきであるのかという点を中心に考察をしていきたい。

5.1 少人数クラス編成について

少人数クラス編成に関しては、1年生、2年生共に、履修しているクラスの人数が適切であるという回答が9割を超えている。人数が適切であるとの判断は、インタビューにおける学生のコメントから、高校での英語のクラスサイズと比較するという“授業での印象”を元に行われる一方、“授業で得られた成果”(井澤・増富, 2010)を元にも行われていることが多いことが明らかになった。これは、少人数編成のクラスにおいて、授業内のグループワークがしやすくなったことや、クラスメートや教員とのコミュニケーションが取りやすかったこと

が多くあげられていたことによる。

したがって、学生が教員やクラスメートとコミュニケーションを取りながら学べる環境を提供するためには、外国語教育研究センターの英語リーディングクラスを少人数クラス編成とすることに意義があることが明らかになった。また、少人数クラス編成とすることで、教員側も学生の学びの進捗をより正確に把握することができ、学生の理解度を確認しながら、より適切な授業を行うことが可能となるだろう。

5.2 習熟度別クラス編成について

習熟度別クラス編成の有用性に関しては、「習熟度別クラス編成は有用だと思いますか」という問いに対して、1年生の49.8%が「そう思う」、28.4%が「ややそう思う」と、2年生は34.9%が「そう思う」、32.2%が「ややそう思う」と回答しており、1年生よりも2年生の方が「そう思う」の回答率が少なかった。この点を統計的検定によって確認したところ、1年生と2年生の間には統計的に有意な差があり、「そう思う」と回答した2年生の数が著しく少ないことが明らかになった。

この差は、1年生では全ての学生に習熟度別クラス編成が実施されているのに対し、2年生では習熟度別クラス編成が実施されていない学生が含まれていることによって生じている可能性がある。この点を確認するために、2年生について、習熟度別クラス編成が行われた政治学科と理学部の学生の回答と、習熟度別クラス編成が行われなかった文学部に分けて統計的検定を行った。その結果、政治学科と理学部の学生の回答と文学部の学生の間には統計的に有意な差があり、習熟度別クラス編成が行われていなかった文学部の学生の「習熟度別クラス編成は有用だと思いますか」という問いに対する「そう思う」の回答数が著しく少ないことが明らかになった。以上の結果は、実際に習熟度別クラス編成が行われたクラスを経験した学生の方が、習熟度別クラス編成の有用性に関する認識度が高いことを示している。したがって、英語リーディングクラスの習熟度別クラス編成を継続し、学生が各々のレベルに適したクラスで前向きに英語学習に取り組む環境を提供することが重要であると言えるであろう。

インタビューのコメントからは、習熟度別クラス編成の有用性として、同じレベルのクラスメートとは同じ問題がわからないため話し合いがしやすい、レベルが同じ方がお互いに相談しやすい等のクラスメートとの関係を意識したコメントや、教員側も教えやすいのではないかと教員を意識したコメントが見られた。また、英語習熟度が低い学生の中には、混合クラスでは、英語ができない場合は取り残された感じがし、かえって英語学習に無関心になってしまうという混合クラスの短所を指摘するコメントもみられた。更に、比較的英語が得意である学生からは、混合クラスでの授業の進度や内容が自分には不満足である、自分の学習の妨げとなるといったコメントが見受けられた。

これらのコメントから、習熟度別クラス編成と混合クラスの双方に関して、学生もメリットとデメリットを認識していることが明らかになった。高橋(2000)があげる主なメリット(学習者の学力に応じた授業を提供することで学力向上につながる、上位クラスの学習者はお互いに刺激を受けて学習意欲が高まる、下位クラスの学習者は優れた学習者による圧迫感なく学習ができる、教員側も教えやすい)は、全て学生のコメントの中に見受けられた要素である。その一方で、デメリットの中の「差別・選別意識が生まれる」、そして「上位クラスの学習者が優越感を抱く」という要素に関しては、学生のコメントの中には見受けられなかった。選別意識がある場合も、自分とは異なる習熟度の相手の状況を冷静に分析しており、デメリットとして感じられるものではなかったからであると思われる。むしろ、自分だけがわからなくて質問をするとみんなに迷惑をかける等、周りのクラスメートや教員のことを“おもんばかり”学生のコメントが多かったことは、習熟度別クラス編成を導入する際のデメリットを小さく抑えることができたということを示唆していると思われる。

以上の分析から、当センターの英語リーディングクラスにおいて、少人数、習熟度別クラス編成を導入したことは、学生にとって意義があると言えるだろう。また、学生がクラスメートを“おもんばかり”ながら、発言や質問をすることができる環境を提供することが重要であることも明らかになった。したがって、教員が詳細にそれぞれの学生の学びの進捗を把握し、より適切な学びの場を提供することが重要となるだろう。

6. おわりに

本研究では、少人数クラス編成と習熟度別クラス編成に関するアンケート調査と学生へのインタビューの実施を通し、当センターの英語プログラム改編を進めていく中で、少人数クラス編成と習熟度別クラス編成の導入の重要性が明らかになった。

しかしながら、今回のアンケート調査は web アンケートの形式をとり、回答率も 60～70% となっている。より正確な分析のためには、マークシート方式の調査を実施し、回答率を上げることも必要となるだろう。また、より多くの学生にインタビューを行い、より詳細に学生の状態を把握することも必要となるだろう。

また本研究では 1 年生と 2 年生を学部ごとに分析する形をとったが、今後、英語の習熟度が高い学生と低い学生を比較した分析も必要となるであろう。さらに、今回はリーディングクラスの分析を行ったが、コミュニケーションクラスとの比較分析も必要であると思われる。

引用文献

- 伊澤佑子, 増富和浩 (2010) 大学における基礎英語教育の内容と指導方法に関する研究. 2010 年度教育推進プログラム 13, 1-6. 宮城学院女子大学. https://www.mgu.ac.jp/miyagaku_cms/wp-content/uploads/2021/11/2011suishin13a.pdf
- 上田倫史, 勅使河原三保子, 林明人 (2014) 英語習熟度別クラス編成開始に向けての学内英語レベルの調査 (2). 駒澤大学総合教育研究部紀要 8, 269-289.
- 小笠原真司 (2012) 英語習熟度別クラスの効果的運用について—工学部総合英語Ⅲの G-TELP データによる分析—. 長崎大学教育機能開発センター紀要 3, 9-20.
- 剣持淑, 大年順子, 阿部正敏, 荻野勝, 寺西雅子, 宇塚万里子 (2013) 英語新カリキュラムのスキル別科目に関するアンケート調査. 岡山大学教育研究紀要 9, 111-122.
- 国際基督教大学 (2022) リベラルアーツプログラム—英語力を高め、思考力を養

学生から見た少人数・習熟度別クラス編成 アンケートとインタビューに基づいて (志村美加・中竹真依子・小杉弥生)

- う. <https://www.icu.ac.jp/academics/undergraduate/ela/>
- 東京都教育委員会 (2020) 東京方式 少人数・習熟度別指導ガイドライン (改訂版) 《中学校 英語》. https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/document/advancement/files/on_achievement/02.pdf
- 鳥飼久美子, 進藤久美子 (1996) 『大学英語教育の改革』三修社.
- 大学英語教育学会実態調査委員会 (2002) わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の学部・学科編, 33-36.
- 高橋寿夫 (2000) 外国語科目「英語」の改善に向けて—習熟度別クラス編成について—. 関西大学文学論集 49 (4), 143-62.
- 竹蓋幸生 (1997) 『英語教育の科学—コミュニケーション能力の養成を目指して』アルク.
- 田原良子, 堀江美智代, 竹内光悦 (2001) 習熟度別クラス編成に関する考察 (1), 鹿児島純心女子短期大学研究紀要 31, 215-244.
- 西出崇 (2019) 外国語科目における主塾度別クラス編成方法の課題と改善—技能別習熟度を考慮したクラス編成の提案—. 第 8 回大学情報・機関調査研究会発表要旨, 44-49.
- Hasegawa, Shuji, Kuwana, Shun'ichi, & Hojo, Yoko (2019) A Diachronic Study of Small Track Classes in University (1): Does the Students' English Proficiency Improve? Bulletin of Education and Health Sciences, Uekusa-Gakuen University. 11, 29-39.
- 平野亜也子 (2022) 「特別英語」カリキュラム開発のための学生に対するニーズ分析—英語習熟度と選好性との関係—. 京都産業大学論集 人文科学系列. 54, 197-209.
- 法政大学 (2022) 基礎教養としての語学教育. <https://www.hosei.ac.jp/kyoiku/tayosei/sogo/kisokyoiku/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54>
- 水野真理子, 山岸倫子, 木村裕三, 竹腰佳誉子, 藤川勝也, 小田夕香理, 荻原洋 (2022) 英語習熟度別クラス編成に向けて—上級、基礎力拡充クラスの実施—. 富山大学教養教育院紀要 3, 82-88.
- 三村智恵子 (2021) 大学におけるグローバル英語教育を考える—学部横断統

- 一英語プログラム見直しに向けて. 大学のグローバル化 情報交換セミナー
VOL.36 (2021年9月3日 株式会社アルクエデュケーション主催)
- 文部科学省 (2021) 令和3年度 英語教育実施状況調査. https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00001.htm
- 立教大学 (2022) 立教大学の英語—立教大学の教育の仕組み. <https://www.rikkyo.ac.jp/education/system/english.html>
- Rodriguez-Yagi, Miki & Rupp, Michael J. (2000) Gaining an Emic Perspective on Streamed Versus Mixed-level EFL Classes at the Tertiary Level in Japan. 東海大学紀要 農学部 39, 1-7.

Students' Perception Toward Small-Size and Streamed Reading Classes —Analyzing Questionnaire and Interview Data

Mika Shimura, Maiko Nakatake, Yayoi Kosugi

In 2021, the Foreign Language Teaching and Research Centre of Gakushuin University started implementing small-size classes and steamed classes as the first stage of reforming of English Program. This study reports the findings of a survey and interviews in which students were asked for their opinions regarding small-size and streamed Reading classes. The participants in this study were first- and second-year students in the faculties of Law, Letters and Science. The survey took the form of a web questionnaire and was conducted at the end of the 2021 academic year. A total of 2347 students responded to the questionnaire. Interviews were also conducted to examine the reasons for answering questions. A total of 21 students responded to the interviews. The analysis of the responses shows that more than 90% of the respondents think the class size was suitable to have good communication with their teachers and classmates. About 78% of the first-year students and 67% of the second-year students think streamed classes are effective for studying with an easy mind.

